実践報告

遊びを楽しむ児童の姿に見る生活科の学びについての一考察

A Consideration of Learning about Life Environment Studies as seen in the Appearance of Children Enjoying play

森田　祐介*

Yusuke MORITA*

【要約】
生活科は小学校低学年の中核とも言われている教科だが何を学ぶ教科なのかはっきりしないという声も少なからず存在する。それは，活動の中で子供たちの学びを見取ることが難しいというところに原因があるように感じる。特に，小学校１年生は遊びを通して，対象との関わりを感じ，対象へ働きかけを深めていく。楽しそうに活動しているけれども児童は何を学んでいるのか。一歩踏み込んで，児童を突き動かす原動力となる楽しさとは何なのか。本実践では，遊びを楽しむ児童の姿から生活科の学びとは何かについて考察をしていく。

【キーワード】
思いや願い　楽しみにつながる視点　試行錯誤　学習環境づくり

１　はじめに

本実践では，遊びの工夫につながる視点を意識させることで，試行錯誤を生み，より遊びを面白くしていく児童の姿を目指していった。人との関わり，自然や身近なものとの関わりが児童を本気にさせ，楽しく遊びたいという意欲を生み出すことができれば，児童の気付きの質も高まっていくはずである。そのような考えに立った時，より子供たちの学びや生活の文脈に沿った学びを展開する必要があるのではないかと感じる。子供たちの思いや願い，さらには発達段階に応じた学びの有りように配慮した指導についても述べていく。

２　本実践について

(1) 単元構成について

本単元は，内容「(5) 季節の変化と生活」「(6) 自然や物を使った遊び」を中心に構成している。児童は，夏の訪れを草花の生長，虫たちの活動，気候の変化等から気付き始めていく。本単元は，夏の自然で遊ぶ活動を通して，夏に関わる気付きを積み重ね，夏をより楽しむための活動をつくり出し，日々の生活を豊かにしようとする態度を育んでいくことをねらいとしている。その中でも，「水で遊ぶ」(以下水遊び) ということに焦点をしぼり単元を構想することとする。水遊びを通して期待できる学習の価値として，①冷たさや温かさ，感触や流れる感覚，透明性や音といった五感を通して特性に触れることができること，②遊びの中で自然の不思議さ（流れ方や浮力，表面張力，水圧）を実感することができること，③それらを生かして遊びを工夫することができることが挙げられる。また，水という学習対象に遊びを通して働きかけるので，児童の主体性を引き出し，「身近な生活に関わる見方・考え方」を生かして，児童が対象との関わりを深めていく姿が期待できると考える。季節感を生かした遊びを精一杯楽しむ経験は，その後の秋，冬に関連する学習対象への関

＊佐賀大学教育学部附属小学校

わり方につながっていくものである。

(2) 指導方略について

指導にあたっては，まず雨の日の校庭に目を向けさせ，経験とイメージを共有することで雨の日の校庭を歩いてみたいという思いをもたせる。「雨たんけん」では，水たまりや泥の上を歩く感触を味わわせ，流れる水で遊んだり，雨粒を体感したりする中で，雨の日の楽しさを味わわせる。ここで気付いた水や泥の特性は遊びをつくり出す上での布石となる。その後，晴れの日の様子と比べ，「晴れたんけん」を仕組んでいく。自然に浸り，夏ならではの遊びを味わう体験をきっかけとして「水で遊びたい」という思いにつないでいく。水遊びを自分たちの経験から想起させ，遊びを生み出せるような材料（ペットボトルや牛乳パック，カップといった容器，雨どい，洗濯桶など）や場を仕組んでいく。その中で存分に楽しむ様子や遊びの中で生まれた気付きに価値付けを行ったり，試行錯誤の機会を保障したりすることで，水遊びに繰り返し働きかけようとする意欲を高めていく。

11 時目では，前時までにつくり出した遊びを工夫する時間と設定する。まず，遊びの工夫につながる視点（以下視点）を想起させながら，各々がめあてを決めて活動するように促す。見通しをもって活動することでこだわりが生まれ，遊びの工夫につながるであろう。活動の中では，「くらべる」「ためす」「きょうそう」「いっしょに」「へんしん」等，視点を意識できるように声掛けを行っていく。また，共に遊ぶ姿や思いや考えを伝え合う姿は積極的に取り上げ，全体へと広げていきたい。そこで見られるこだわりも「見方・考え方」を生かすものとして児童と共に確認したり，主体的な姿として価値付けたりしていく。11 時目の最後には，活動を振り返り，めあてが達成できたかも含めて児童の活動や気付きに価値付けを行うことで，楽しんだり工夫できたりしたという満足感を味わわせる。そして，今後の活動の方向性を決める場面を設け，みんなで遊ぶための会をしたいという新たな思いや願いを導き出していった。

(3) 本実践で目指す児童の姿

夏の自然と関わる活動を通して，身近な自然の違いや特徴を見付け，自然を使った遊びの面白さに気付くとともに，自分たちの生活を楽しくしようと活動を生み出すことができるようにする。

(4) 本実践の評価基準と単元計画（※枠内が主な実践場面）

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①身近な自然の様子や自然を使った遊びの面白さに気付いている。 ②身近にあるものを使って，遊びをつくり出すことの面白さに気付いている。	①夏の自然と関わる活動を通して，身近な自然の違いや特徴を見付けている。 ②自分のおもちゃや遊び方を工夫し，こだわりながら楽しんでいる。	①夏の楽しみ方を見いだし，自分の生活を楽しくしようとしている。 ②夏の自然と関わりたいという思いをもち，いろいろな遊びを繰り返し試している。

時	主な学習活動（〇）児童の意識（・）	教師の働きかけ（〇）と主な評価規準（◆）
1	〇　雨の日のことを想起しながら，「雨たんけん」の計画を立てる。 ・雨粒があたると気持ちいいよ。 ・水たまりの中を歩いてみたいな。	〇　雨の日の運動場の様子や経験したことを想起させることで，児童がもっている雨に対する気付きや思いを引き出し，「雨たんけん」に出かけるという活動計画を立てる。
2 3	〇　「雨たんけん」を行う。 ・傘が邪魔で並びづらいな。 ・大きな川が流れているみたいだよ。つなげて遊びたいな ・水たまりに飛び込むと水しぶきが上がって面白いよ。 ・泥の感触が気持ちいいな。 ・晴れの日とは違う面白さがあるね。	〇　雨合羽や長靴を用意させることで非日常観を演出し，楽しい雰囲気をつくり出す。 〇　雨の日の歩きづらさや見通しの悪さも体験させることで正しい歩行の仕方も意識させる。 ◆　雨の日ならではの運動場の様子に気付いたり，水たまりや流れる水で遊んだりしながら，雨を楽しんでいる。

4 5	○　身近にある公園へ「晴れたんけん（公園遊び)」に出かける。 ・雨があまり降らなくなるとせみの声が聞こえてきたよ。 ・最近，バッタやトンボも捕まえたよ。 ・晴れた日に外でみんなで遊びたいな。	○　雨の日の面白さを存分に味わわせた後，季節の移り変わり（梅雨から盛夏）や夏らしさを想起させ，夏を感じる「晴れたんけん（公園遊び)」の活動を設定する。 ○　校外に出る際の約束や安全面で気を付けなければならないことを指導し，意識させる。
6 7	○　「晴れたんけん（公園遊び)」をもう一度行う。 ・すごく暑いからしっかりお茶を飲まないとね。 ・お堀に船が浮いているよ。 ・バッタやトンボを捕まえたいな。 ・みんなと遊ぶと楽しいね。 ・赤ちゃんやお年寄りの方もいるね。	○　五感を生かした夏みつけを意識させると共に，友達と十分に遊ぶ時間を保障して，みんなで遊ぶ楽しさを味わわせる。 ○　公園内で気付いたことや挑戦してできるようになったこと，遊びを楽しんでいる様子に価値付けを行う。 ◆　友達と共に遊ぶ楽しさに気付き，遊びを工夫しながら楽しんでいる。
8 9	○　水遊びを試す。 ・ペットボトルに穴を開けて，水鉄砲にしてみよう。 ・そうめん流しみたいなことをしたいな。 ・桶の水はとっても気持ちがいいよ。 ・水の流し合いで勝負したいな。 ・なかなか的が倒れないな。 ・キャップに穴をたくさんあけると勢いが強くなるよ。 ・ビー玉すくいがやれそうだね。	○　暑い夏をもっと楽しむためにはどうするか問いかけ，幼稚園のことを想起させたり，公園で遊んだ際の水の気持ちよさを語り合ったりさせることで，水遊びに意識を向けさせていく。 ○　多様な遊びが生まれ，遊びを通した交流や遊びの工夫が生まれるように材料を準備したり，場を設定したりする。 ○　児童が遊びを工夫しているところや面白いところを価値付けることで，遊びの工夫につながる視点を意識させたり，自信や意欲をもたせたりする。
10 11	○　自分たちで水遊びを考え，楽しむ。 ・ホースの中にビー玉を流して，ビー玉競争したい。 ・もっと強い水鉄砲を作りたい。 ・水鉄砲で虹を作りたい。 ・金魚すくいを作って楽しみたいな。 ・水くみ競争をして楽しみたいな。 ・牛乳パックにたくさん穴をあけて，シャワーを作りたいな。 ・紙が破けないかどきどきするところがおすすめだよ。	○　自分たちで作った遊びのおすすめポイントや工夫の視点を意識させ，価値付けを行うことで遊びを工夫して楽しめていることを実感させる。 ○　試行錯誤しながら，繰り返し水遊びづくりを行うことができるように，同じ遊び同士の児童を引き寄せたり，児童の思いや願い引き出し，アドバイスを行う。 ◆　自分たちの水遊びをつくり出そうと思いや願いに沿って粘り強く取り組んでいる。
12 **本時**	○　自分たちでつくった水遊びをもっと楽しむための工夫を考える。	○　遊び方について意見が割れている場合には，自分の思いや願いを自覚させ，折り合いを付けることができそうなところやもっと面白くできるようにするにはどうするか考えるように促す。 ○　他の友達に遊んでもらいたい，他の遊びの工夫を取り入れたいという思いが強くなった場合には，それぞれの遊びで交流することも促していく。
13 14	○　１の３サマーフェスタの準備をする。 ・２年生を招待して，水遊びで楽しんでもらいたいな。 ・上手に説明ができるかな。看板に遊び方を	◆　自分のめあてを基に遊びを楽しんだり，工夫したりしている。 ○　自分たちだけでなく，他のクラスや上級生を

15	書いておいたらいいね。 ○　１の３サマーフェスタをひらく。 ・たくさんのお客さんが楽しんでくれて嬉しいな。 ・失敗もしたけれど，頑張ったら分だけ成長できたね。 ・今度もみんなでお祭りをしたいね。	呼ぶという目的意識，相手意識をもたせることで，遊び方を伝えたり表現したりする意識をもたせる。 ○　水遊びをつくり出すことを通して，工夫できたことや面白さを追究してきた自分の成長にも気付かせる。 ◆　水遊びをつくり出す楽しさやみんなでやり遂げる達成感を感じ，粘り強く取り組むことのできた自分の成長に気付いている。。

３　実践の実際　　※7 時目までは割愛

(1) 水遊びを試す児童の様相【８，９時目】

図１　地面に絵を描いて楽しむ児童

7 時目では，暑い夏をもっと楽しむためにどんな活動をしていきたいかという問いかけを行った。前時までの公園遊びの中で水の気持ちよさを味わっていた子供の発言やこれまでの経験をつなげながら水遊びへと意識を向けることができた。水遊びとの出合いの時間では，遊び方を意識させすぎるのではなく，一人一人が水や材料とたっぷりと関わり，その面白さや心地よさを十分に味わることができるようにした。いろいろな遊びを試しながらお気に入りの遊びを見付ける過程を大切にすることで，自分の遊びに満足したり，そこから生まれる気付きが遊びの工夫につながったりしていくと考えるからである。以下，児童の様相を中心に語りながら，どう学びをつなげていったのかについて示す。

ア　ペットボトルで水鉄砲をつくる児童

図２　一緒に的を倒そうとする児童

まずは，ペットボトルを用いて水鉄砲をつくる子供たちが大勢いた。水鉄砲から水ができること自体面白さを感じていた子供たちも地面に絵を描いたり，木の枝を的に見立ててかけようとしたりする姿が見られた。そこからペットボトルを的にして，倒そうとする遊びを楽しむ児童が出てきた。そのペットボトルがなかなか倒れないことから子供たちの試行錯誤が始まる。何人かで力を合わせて，ペットボトルを倒そうと協力し始めたのである。ただ，なかなか倒れないペットボトルを前にもっと勢いをつけるためにどうしたらよいかという思考が働きだした。お互いの水鉄砲を比べることを勧めたところ，ある子供のキャップを見てみると穴がたくさんあいており，それが勢いよく水が出る仕組みにつながることに気付いた子供がいた。そこから，強い水鉄砲を作るためには穴をたくさんあけるという気付きが生まれたのである。

イ　ホースを用いた遊びを考える児童

図３　ホースに水を流す子供たち

今回，透明なホースを用意した。そのホースを使い始めた子供たちは水を貯めて流すという遊びを始めた。コンテナを積み上げて上から水を流し込んでいる様子から「水は高い所から低い所へと流れる」とい知識を生かしている子どもの姿が見られた。その中にビー玉を入れて流れ出ていく様子が面白かったよ

うだ。その後，溜まった水たまりの中に手を入れて，温められた水の不思議さを感じたり，泥の感触の気持ちよさから泥団子づくりを楽しんだりする姿も見られた。

ウ　雨どいを用いた遊びを考える児童

雨どいに目を付けた子供たちは２つ雨どいをつなげて，両端から水を流し合う遊びを始める。最初は水を流すこと自体が面白かった児童たちも，相手よりたくさんの水を流したいという思いからぶつかり合うこともあった。遊びに没頭するがあまり思いが先行しまったのである。児童たちの「負けたくない」という思いも大切にしながら，どうしたら楽しく遊べるのか諭すと，「みんなで１つのものをつくりたい」という思いをもつことができた。こういう遊びの中で折り合いを付けていくということも大切な学びの１つである。

図４　雨どいに水を流す児童

エ　気付きを基に次の活動への思いを引き出す

振り返りの中で表出された気付きを基に，遊びの工夫につながる視点を子供たちと整理を行った。児童の気付きに見られたものは，「たいけつする」「いっしょにできる」等，人との関わりに関することや「ゲームみたい」「どきどき・わくわく」等，遊び方に関することである。その視点を意識させることで気付きの質は高まり，遊びの工夫も広がっていった。

(2) 楽しい水遊びをつくり出そうとする児童の様相【10，11 時目】

導入では，つくりたい遊びを想起させることで工夫につながる視点も意識させることと試みた。「たいけつする」ことや「いっしょにできる」こと，どんな遊びが楽しいか尋ねた時に出てきた「わくわく・どきどき」することも工夫につながる視点として意識させて活動に入っていった。

ア　ビニール袋を魚に見立てて釣り遊びを楽しむ子供たち

前時から金魚すくいや釣りをしたいという児童も少なからずいたが，どのように魚を表現するのかが課題であった。ある児童は，ビニール袋に水を入れることで水に浮かぶと想定していたが，想定は外れ，水面から顔を出さなくなってしてまった。その様子が気に入ったのか，紐をつけて魚を表現したのである。ただ，どのように釣り上げるのかまではイメージができていなかったので，「どうやって釣りをやるか分かる？」と問いかけたところ，釣り竿が必要であるということに気付いたのである。そこからＳ字フックを釣り針に見立て，紐で作った輪に引っ掛けることで釣り上げるという遊びをつくり出すことができた。

図５　袋を魚に見立てる子供たち

イ　ビー玉すくいで遊ぶ子供たち

ビー玉をどれだけおおく集めることができるか競い出す児童たちも現れた。「ヨーイドン！」の掛け声で一斉にビー玉をすくい，遊びに没頭する様相が見られるグループがあった。ただ，どのように遊びが発展していくのかについては，今後，課題の残る遊びではあった。「どきどき・わくわく」の視点をもとに児童たちと没頭できていたことに価値付けを行いながらも，より発展性のある遊びへとパワーアップさせるために次時への見通しをもた

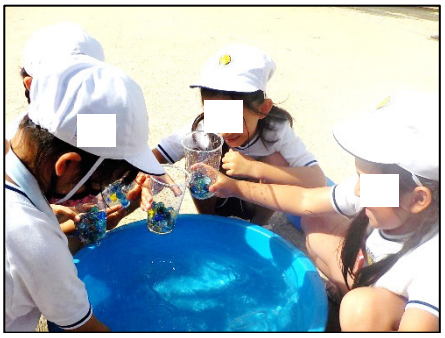

図６　ビー玉すくいに没頭する児童たち

せていきたい。

ウ　的を落とすために活動に没頭す子供たち

様々なものを的として水鉄砲遊びを行っていた子供たちであったが，一番活動に没頭していたのは，的を落とすという遊びであった。発砲トレーを紐にぶら下げることで発砲トレーを落とすという目的が生まれたのである。子供たちの頭上に設置された的でもあったので，自分たちにも水がかかるという二重の面白さがあったようである。また，的が１つだけということもあり大人数で遊ぶ高揚感もあり，人気の遊びとなっていった。「的は１つだけでいい？」という問いかけに増やしてみんなで対決したいという返答がかえってきた。まだまだ，遊びの工夫に広がりの余地がみられた瞬間であった。

図７　的をめがけて没頭する子供たち

エ　雨どいを組み合わせて，スライダーづくりを楽しむ子供

雨どいを使ってスライダーを作ろうとする新たなチームが生まれた。雨どいを安定できず，苦慮していたようであったが，「どうしたらズレないかな？」と問題点を顕在化してあげると，紐みたいなもので結んだらいいという解決方法を導き出すことができた（図 10）。そこから長くつなげて，カーブをたくさん作りたいとう思いを叶えて，何度もペットボトルキャップを流すことを楽しんでいた。子供たちの遊びの問題点を教師が顕在化することも時には必要なことであると感じた。もっとカーブを作りたいという思いのもと本時の活動へ向かう子供たちの姿に期待していきたい。

図８　何とかつなげようと試行錯誤する児童

オ　様々な遊びを楽しもうとする児童たち

すべての児童たちが１つの遊びを追究できてきたわけではない。時には，遊びが上手くいかず他の遊びに変わってしまう児童もいた。思いや願いが強くなるためには，やはり気付きの質の高まり（遊びの面白さに触れること，分かる）を児童自身が感じることが必要である。そうでなければ，意欲も長続きしづらい。ただ様々な遊びを経験しながら，自分の関心にあった遊びに出合うことができれば，自ら対象に働きかけ続け，没頭して遊ぶことができる。それは，友達との関わりの中で生まれる楽しさや対象がもっている学習材としての価値をどこまで教師が引き出せるかにかかっている。多様な遊びを許容しながらも児童たちがより活動に没頭したり，遊びの工夫を見いだしたりする姿を表出させるために，次の活動に向けて，思いや願いをもたせ，遊びの工夫につながる視点をより意識させて，次時の授業に向かわせた。

図９　的当て遊びに遊び方を変えた児童

(3) 楽しさを味わいながら，新たな活動への思いをもつことができた児童の様相【12 時目】

遊び始めて５時目ともなると互いのやりたいことや遊びの目的意識が共有されていき，協同的に遊び始める児童の姿が増えるようになってきた。上手くいかないからあきらめるのではなく，何とか乗り越えようとする児童の姿があった。児童の声を聞いていると「こうしたい，ああしたい」という思いや願いを聞くことができるようになった。しっかりとした目的意識があるからこそ，粘り

強く取り組む姿勢や工夫を重ねていこうと試行錯誤することができるのではないだろうか。

なかなか上手にできなかった「スライダーチーム」も遊びの内容を変えながらも成功できたとい う達成感をもって 1 時間を振り返ることができていた。児童が真に学習の主体となって学びをつくり出していく過程を踏んでいるからこそ，本気で対象に関わり，働きかけ，自信をもって活動できるのではないだろうか。幼稚園で学んできたことを徐々に系統的な学びへとつなげるためには遊びを通した学びが必要であると本実践を通して実感した。さらに，今後の活動をどうしていきたいかと問うと，「他のクラスと遊びたい」と新たな活動を見いだすことができていた。遊びのフィールドを広げることで更に楽しめそうだと気付くことができるようになってきた。

図 10　真剣に水を分け合う児童

本実践で大切にしてきたことの１つに学習環境づくりがある。児童の思いや願いに応える，新たな遊びのヒントとなる学習材の検討。児童同士が刺激し合って，対話を生み出したり，新たなアイデアにつながるような思考を促す学習材の配置。更には，教師自身が学習環境となり，児童の考えや思いを受け止め，時には壁となり，児童の遊びに疑問を投げかけ，無自覚に遊んでいた部分を意識させたり，自信をもたせることができたりと授業者自身の振る舞いは低学年児童にとって大きなものであると感じた。

4　まとめと考察

本実践では，水遊びを楽しむ児童の姿から生活科の学びについて考えてきた。幼児期との接続期にある低学年では，遊び自体が児童の生活の一部であると言っても過言ではない。児童は遊びを通して，対象を認知し，働きかけながら自分を環境と調整させながら，様々な知識や技能を身に付けていく。遊びこそが，児童にとっての本物の学びなのである。そこでは，これまでの経験や学びを総動員して児童にとっての課題を解決する場になっているのである。ただ，そこで働いている見方・考え方，資質・能力等は無自覚であるために見えにくい。そこに授業者の価値付けがあるからこそ，児童が対象に価値を見いだし，働きかけが教科され，自分にとって特別なものになるのである。生活科における遊びは，学びに向かう意欲面を育んだり，学びを統合的に発揮できる場としての役割があるということを児童の姿から見取ることができた。